

## ■はじめに

弊社は、医療福祉専門職で構成する一般社団法人であり、2016年から移動式屋台でまちに繰り出し、住民とコーヒーを介して対話する取り組み「YATAI CAFE」を続けてきた。2020年に法人化し、社会的処方（コミュニティの処方）をテーマにしたシェア型図書館「だいかい文庫」を開設した。だいかい文庫は、医師や福祉専門職等からの患者紹介もしくは直接来店した方にだいかい文庫もしくは地域のコミュニティを紹介する取り組みを行っている。

## ■取り組みについて

だいかい文庫は、既存の制度上にある縦割りの医療福祉の相談の場、マイノリティの居場所ではなく、本というテーマに共感した人、誰もが集まれる図書館として、創造した。図書館としても、居場所としても使え、お店番という役割を持てる。本が好きなら、障害、高齢者等のカテゴリーに関係なく自分に合った使い方ができるケアとまちの拠点である。

孤独はタバコ15本に相当する死亡リスクであると言われており、孤独の解消が必要である。本プロジェクト責任者の守本は、家庭医であり、病院内での診療に限界を感じていた。はじめは屋台で地域に出て住民とコミュニケーションを取り始めた。手応えを感じた後、実際にある場を作ろうと考え、地域で孤独を解消するためのデザインとして、だいかい文庫が生まれた。これまでであるような相談や居場所は縦割りであり、制度にのることではじめて支援を受けることができる。「す

## まちむら発見①

# シェア型図書館での社会的処方の取り組み

兵庫県豊岡市 一般社団法人ケアと暮らしの編集社



公園のYATAI CAFEでコーヒーを淹れる医療者たち

べての人に健康と福祉を」のSDGsを意識し、既存の居場所に来なかつた層にもリーチするべく、誰もが訪れることができ、その人にあつた使い方ができるようなデザインとして、シェア型図書館とケアの場を併設した。また立地する豊岡市街地が地方都市であり、空き家も増えていること、本屋が減少し続けていることから空き店舗を活用した図書館の場とした。

だいかい文庫は、ケア側からまちの地域資源を知りきつかけとなる拠点、まち側からケアの支援を受ける入り口として意識した。instagramでの発信や手書きのお便りを市内に配布し、一般市民に認知してもらった。そこから訪れた元引きこもりの方は、大学を辞めて家に引きこもりかけていた時にだいかい文庫を知り、通うようになった。その後、本棚を持ち、お店番をは

じめた。地域の方との会話をし、図書館で人と出会うことで、自分の可能性を知り、社会復帰につながった。また精神科医や障害者の相談支援員、ケアマネージャー等にだいかい文庫を知ってもらい、だいかい文庫を紹介してもらい、だいかい文庫や他の社会資源、地域の居場所を紹介した。統合失調症の方は、だいかい文庫を気に入り、家庭、就労支援に次ぐ、サードプレイスとしてだいかい文庫を利用し、お店番やお客さんとの会話を楽しんでいる。ケアとまちをつなぐ社会的処方

の拠点となっている。

だいかい文庫の特徴として、図書館、居場所、お店番という役割として利用可能な一箱本棚オーナー制度を使った関係性のグラデーションが挙げられる。図書館の利用者として、居場所として、お店番として、自分にあった使い方ができる。また、これまで相談の場に来なかった人も対象にした図書館という名の医療福祉色を前面に出さないケアの相談の場でもある。図書館というカジュアルな場にある相談の場は、図書館を利用する中で気軽に相談ができ、これまで来なかった層にもリーチできる。さらに、商店街に立地し、コミュニティナーズが常駐するケアとまちをつなぐコミュニティを処方する社会的処方の拠点でもある。

だいかい文庫の設立前、約8年前に、プロジェクト責任者の守本は、まず豊岡市の地域診断から始めた。地域住民へのヒアリング、データ分析などから、地域のコミュニティの希薄化、救急車を呼ぶことにためらいがある等の課題が抽出された。医療教室からはじめたものの、人の集まりが悪く、医療や健康の押し売り



本にまつわる話をする来館者たち



夜にも開館する図書館型地域共生拠点だいかい文庫

には限界があると考えた。そこで、6年前にYATA I CAFEという移動式屋台でコーヒートを配りながら、住民と対話をする活動をはじめた。月1回程度の開催ではあったものの、医療相談のみならず、医療福祉関係者が行うゆるいつながりの場であることから障害者や疾患を抱えた方など、マイノリティも多く参加し、人と人、人とコミュニティの出会いの場になっていた。YATA I CAFEの固定の場を持つという意味でもはじめたのが、だいかい文庫である。8年の継続的な活動と地域の専門職、住民と協働が、地域にあったデザインにつながっている。

まちと医療福祉の新しい関係性をデザインできた場が、だいかい文庫だと考えている。ただの医療相談の場でもなく、特定の当事者のピアサポートの居場所でもない。当事者に寄り添い一緒に悩む居場所の相談所、だいかい文庫という場での継続的な当事者との関わり、本を通じた住民と当事者の出会いの場、本棚で自分らしさを発揮できる表現の場。テーマでつながるコミュニティ/居場所、当事者がお店番という役割で地域とつながる場、社会的処方の拠点。さまざまな役割がだいかい文庫には存在する。一見、なにをやっているかわからない場ではあるものの、だからこそ、あそこに行けばなにか解決してくれるのではないかとという小規模多機能な公的な場になっている。昔のお寺や教会のような場である。制度と制度の狭間にある人、支援を必要としない人も含めて、誰もが居場所や役割を持てるような地域社会に向け、だいかい文庫のような場が広がることを願っている。